

▶ **日本国危うし！！歴史から学ぶ「国が減びるとき」！！**

歴史に強い二人の先生が、古代ローマ帝国など隆盛を極めた国が減びた原因を整理しています。その理屈から行くと日本がどうなのかを私が整理しました。結論は？？

▶ **「100年予測は可能なのか」日本どうなる？**

米国の大家が書かれた予測だと、21世紀中に日本は戦争をすることになっています。私は「それどころか日本国危うし」の主張をしています。

▶ **「反日韓国」の自壊が始まった」もう韓国をあまり責めたくないのですが**

前書きに書きましたように、呉善花さんの研究に対する応援歌です。

▶ **「人と企業はどこで間違えるのか？」**

原本は米国で起きたビジネス不祥事または失敗案件の紹介書なのですが、我田引水しました。

▶ **「大義なき選挙」の大義は何だったのか！**

お馴染田崎史郎さんの「安倍官邸の正体」の紹介です。かなり克明に安倍総理の意思決定・思考法を追いかけておられますが、謎の全部は解明されていません。

▶ **なぜ人間は誤った判断をするのか！「失敗はそこからはじまる」**

こちらは、本格的な主に実験に基づく研究成果の発表で感嘆あるのみです。著者は美人イタリア人準教授です。

▶ **我が家の河津桜が満開です**

14年目の河津桜の写真です。



【このテーマの目的・ねらい】

目的：

- 国としての日本がおかれた危機的状況を再認識しましょう。
- どういう時に国が危ないのかを歴史から学びましょう。

ねらい：

- 一人ひとりが反省と自覚をして行動しましょう。

この項も愛読誌「致知」からのご紹介です。

月尾嘉男東大名誉教授（工学博士）と中西輝政京大名誉教授（国際政治学が専門）との対談「歴史に学ぶ日本のすすむべき道」です。

このタイトルからすると、よくありがちな前向きなべき論かと思います。

ところが違うのです。議論の中心は国はどういう時に滅びるかなのです。要点をご紹介します。

**1. この僅か60年余りの期間に200近い国が減びている。**

代表例は、旧中国、東ドイツ、ソ連、

**2. 代表的な滅びた国**

- カルタゴ（経済優先の国で国防も傭兵に頼った）
- 古代ローマ帝国（「パンとサーカス」を国民が求め墮落）
- 唐（商品流通経済が謳歌され、文明が衰退して滅亡）
- ヴェネツィア（1797年ナポレオンに降伏。）  
16世紀以後階級が固定化し、貴族階級が国を支配した。固定化は変化への適応力が低くなる。彼らは結婚しなくなって人口が減って衰退した。それまでの繁栄の基だった貿易をリスクが高いと敬遠し、土地の資産運用で生活をするようになった。土地の分割で分け前が減るからと、子供を増やさなかった。技術革新（造船技術）も怠って生命線を失ったことも敗因。
- 19世紀のヨーロッパ（金融経済のグローバル化によってヨーロッパに富が集中し、ヨーロッパ人の腐敗や傲慢さを生んだ。第1次大戦でヨーロッパ文明は滅びた）
- 中国（共産党と文化大革命で伝統・文化を破壊した）
- ロシア帝国（共産主義がロシアにあったよきものを全部清算した）

**3. 国が減びる原因**

滅びた国は他国に滅ぼされているのだが、自滅する要因も抱えている。

民族性や人間性こそ国家を支える最も重要な柱である。

1) 経済が最も重要な価値を持つようになった時が危ない。

金銭至上主義の価値観が精神の腐敗・傲慢さを生みだして、国が衰退していく。また、富が不平等になると不満（マグマ）が爆発する。

2) グローバル化で移民が流入し民族性が失われる国は弱い。（上野疑問。移民の国アメリカはどうか？）

3) 今の環境に安住する国は減びる。

生物界で過剰適応という概念がある。ある環境に最適な適応をしてしまうと環境が変わった時に減びる。

例：ニュージーランドには80数種類の鳥がいた。150年前にイギリス人が猫や狐を持ち込んだ。天敵がいなかったので飛べなくなっていた鳥34種類は減びた。

4) 人口減少も減びる要因である。

ソ連も東ドイツの滅亡にもこの要因がある。

5) 安全保障（軍備）をないがしろにした国は減びる

第2次大戦の緒戦でフランスがナチスドイツに完敗したのは、文化に溺れて軍備を軽視したため。

参考：富の不平等——ジニ係数

富の不平等さを示すジニ係数が4を超えると革命や反乱が起きる。

中国は6.1で限界を超えている。  
（上位10%の人が64%の家計資産を持っている）  
アメリカは4に近付いている。  
（上位5%の人が60%の家計資産を持っている）

日本はまだ2.7くらい。

4. 日本はどうか。

明治維新から日本は工業社会で成功した。その原理は画一性（大量生産原理）である。そこに過剰適応してしまっている。

現在は情報社会である。情報社会の特長は「違う」こと（画一性の反対）である。適応できないでいる。

人口減少にも直面している。

安全保障を軽視またはタブー化している。

以上の点を私なりに整理するとこうなります。かなり危険水域に近付いていると言えます。

国の減びる要因	日本の状況
工業社会への過剰適応	◎
安全保障の軽視	◎
移民による民族性の喪失	◎
人口減少	○
経済至上主義	○
富の不平等	△

（注）民族性の喪失は、移民によっているのではなく、敗戦とその後の占領者米国の洗脳により自ら誇りと自信の喪失から生じています。

以下に、両先生の安全保障に関する危機意識を原文のままご紹介します。

**（中西先生）**

安全保障というものは政治や経済よりも、また文化や芸術よりも大切な、国として究極のものであり、この底が破ればあとは地獄なのです。

今の日本人はそういう話題は嫌がるでしょうけれども、日本の安全保障はそろそろ最後の第4コーナーを回っているように思います。

そう遠くない時期にアメリカの第7艦隊が日本から撤退し、中国の航空母艦が伊豆七島近くまで出てくる事態が私にはハッキリ見えます。

そうなると国土は一瞬にして制圧されて、銀座あたりに五星紅旗が立つでしょう。

もうなりふり構わず、日本人に警鐘を鳴らしていかなければならない時期に入ってきていることを、私は痛感しています。

**（月尾先生）**

いまの日本には長期目標がないと思います。明治の人々が考えたような、百年単位で国をどうするといった目標がありません。

目標がないと何が問題かという、用意周到な準備ができないということです。

かつてのアメリカは極めて用意周到でしたし、いまは中国が用意周到です。

中国は昨年末からニカラグア運河を掘り始めました。いずれ米中対決を迎えた時に、中国の息のかかったニカラグアを通して大西洋への通路を確保しようと考えているわけです。

かつてアメリカがパナマ運河を掘削した時は同じことを目指していたのです。

さらに中国はインドとの対決の可能性を予想して、マレー半島の中央のクラ地峡に運河を掘ることも検討しています。

また北極海への進出も準備しており、アイスランドの首都のレイキャビクで最も立派な大使館は中国の大使館です。

ミクロネシア連邦に対しても、中国は同国の国会議事堂の建設費を寄付した上で、その真正面の好位置に立派な大使館を建てています。

中略

(中西先生)

国家の長期目標を考える時に、三つ大切なことがあると私は思います。

一つは決して悲観論に陥らないこと。

日本人はいい精神状態になれば、ものすごい創造性を発揮できる民族なのですが、いまは日本社会全体にどうも悲観論が漂っている。

やっぱり根太い楽観主義のようなものを何より大切に考えないとイケませんね。

二つ目は合理主義です。

きちっと理にかなったことを考えること。

もちろん余裕がある時は様々な情緒的なものを加味しながら、より肌身に合った社会を作っていくことが大切ですが、追い詰められている時は徹底した合理主義でないと生き延びることができません。

三つ目に大切なのは絆です。

私たちの若い頃は、日本人の力の根源は集団主義であるとよくいわれていました。

いまは昔のような集団主義はよくない、とされ、これだけでは人はまとめられませんが、この頃は絆とか、思いやりとかの大切さが再認識されるようになってきています。

こうした「国民の心を一つにする」ものが日本に活力をもたらすと思います。オリンピックなどもその一つですから大事にしたいですね。

(月尾先生)

絆ということ言えば、私は6年間世界の先住民族を訪れてテレビ番組をつくったことがあります。帝国主義時代に欧米に侵略されて帰属する集団がなくなった民族が現在いかに悲惨な生活をしているかということを知ってほしかったのです。

日本の若い人の中に、国家など必要ないというバカなことを言う人もいますが、自分が帰属する、つまり絆を持つ集団のない人々がいかに悲惨な状況かということを知って、広く世界を見て知るべきだと思います。

そうです！！

国民一人一人が日本をダメにしない努力をすべきですね。それぞれができることをして頑張りましょう！！



514 「100年予測は可能なのか」日本どうなる？

No.78 2015年3月

【このテーマの目的・ねらい】

目的：

- 100年先を読むことを考えてみましょう。
- 100年先を読んでみましょう。
- 日本・中国・米国はどうなっているのでしょうか。

ねらい：

- これからも先のことを考えるようにしましょう。

このテーマ名は、東大経済学部の同窓会誌「経友」の191号(2015.2)に新井淳一氏(日本経済新聞社元副社長)が書かれた寄稿文のタイトルです。

氏は昨年刊行されたジョージ・フリードマン氏(影のCIAと言われるらしい米国情報機関ストラトフォアの創業者)の「100年予測」を読まれてこの寄稿をされています。

氏には、100年先を考える機会を与えてくださったことに感謝します。氏の寄稿から主な内容をご紹介します。

### 1. フリードマン氏の21世紀予測

- 1) 盛衰はあるが、基本的には世紀を通じて米国の時代が続く。  
米国の海軍が世界中のすべての海を支配している。
- 2) 米国とイスラムとの間の戦争は近く終局を迎える。
- 3) 勢力を回復したロシアは米国と第2の冷戦を引き起こす。  
20世紀の冷戦と比べればはるかに小規模で、前回同様、ロシアの崩壊で終結する。
- 4) 米国支配への次の挑戦者は中国ではない。  
中国は本質的に不安定だ。  
沿岸部が豊かになっても内陸部は貧困のまま。  
国内で緊張・対立が深まる。  
加えて中国は海軍国ではない。

(上野注：現在中国が海軍力を鋭意強化中なのはどう評価するのか)

- 5) 今後、力を蓄えていき傑出する国になるのは、日本、トルコ、ポーランドである。
- 6) 軍国主義の歴史を背負う日本が平和主義的な2流の大国のままで満足するはずがない。

(新井氏・上野注：人口減で国家滅亡の危機。そんな余裕はない)

- 7) バルカン、コーカサス、アラブはどこも混とんで不安定だ。  
その中でトルコは混沌の中心であり、今後影響力を高める。
- 8) ポーランドの台頭の裏側にはドイツの衰退が絡む。  
ドイツは人口が急激に減り、外交的にはロシアに接近する。

米国と一緒にロシアとの冷戦を戦う欧州の同盟国の盟主はポーランドだ。

- 9) 今世紀半ばには、新たな世界大戦が起きる。  
トルコ・ポーランド・日本が組み、米国連合と戦う。

米国が3国の台頭を抑えようとして圧力をかけ、どの国も欲しないのに戦争になる。日米戦は宇宙戦争だ。結局は米国の勝利に終わる。

(上野注：そこまで日本が軍事力を強化できるとは思えない。今の日本の骨抜き精神で誰がそんな勇ましいことを考えるのか?)

- 1 0) 大戦の勝利で米国は黄金の60年代を迎える。
- 1 1) 世紀の終わりにはメキシコが台頭し米国と争う。  
米国南部地域で、人口バランスが崩れメキシコ人の比率が圧倒的な高さに。その結果、両国関係が悪化、戦争に至る。

### 2. 新井氏の掲げる過去の長期予測の当たった例

- 1) 1952年に連載の始まった手塚治虫氏の「鉄腕アトム」主人公のアトムは2003年生まれとなっていた。  
鉄腕アトムの世界は2003年の日本でほとんど実現できていた。
- 2) レオナルド・ダ・ビンチは1505年に飛行機の予測をした。  
「鳥の飛翔について」という論文で「鳥は科学的な法則に従って動いている機械であり、人間もこの機械と同じものを作ることができるようになる」と述べている。実現したのは400年後である。
- 3) トルストイの1886年作「イワンの馬鹿」  
30年後の現実の世界戦争のような空中戦争を描いている。飛行機が戦争で本格的に使われたのは第1次大戦である。

フリードマン氏は「世紀を作る奔流」を掴んでいけば長期予測はできる、と言っているそうです。

### 3. 新井氏の掲げる「奔流」

- 1) 米国は経済、軍事、政治のいずれをとっても世界最強の国であり、そのパワーに本当の意味で挑戦できる国はない。

しかし、21世紀も米国の挑戦する国もでてきて、20世紀よりさらに多くの戦争が起きる。  
戦争はたいてい偶発で起きる。

- 2) 人口爆発の終焉が起こる。  
2050年になれば、先進国の人口は劇的に減少、2100年までには途上国も総じて人口は横ばいになる。  
人口の増減が国の盛衰につながるがますます明確になり、世紀の半ばから先進国では現在と反対に移民の争奪戦が起きる。
- 3) 国内に対立・不安が多くそれを克服できない国は発展しても限りがある。  
民族・宗教・文化の対立は20世紀と同様に国の命運

を左右する。

- 4) 宇宙を支配する技術、エネルギー技術の長じた国が力を付ける。
- 5) 国と国の関係を地政学の観点から見る必要が従来にも増して重要になる。

さて、100年予測といいますが、技術問題と政治・社会問題では予測の難易度が異なると思われます。

前掲の当たった3例はいずれも科学技術問題です。

政治・社会問題は多くの要因が絡むので予測は簡単ではなさそうです。

別稿の「日本国危うし！！歴史から学ぶ『国が減びる時』！！」で解説されたように歴史を参考にするしかなさそうです。

その点からすると、国が減びる要因は、日本が最も大きく、米国は減びる要因が少ないということが言えそうです。

- ◎：危険水準
- ：該当している
- △：やや該当している
- ：問題なし

国の減びる要因	日本	中国	米国
工業社会への過剰適応	◎	△	—注1
安全保障の軽視	◎	—	—
移民による民族性の喪失(注2)	◎	△	—
人口減少	○	△	—
経済至上主義	○	○	○
富の不平等(注3)	△	◎	○

注1	米国は金融・IT・サービス産業化していち早く脱工業社会となっている。
注2	移民による民族性の喪失については、各国とも直接これに該当することはなく、単に民族性の喪失として評価しています。  日本：敗戦と戦後の占領軍施策により民族の誇りを喪失した。 中国：多民族・少数民族との争いが起きている。 米国：移民による多民族のるつぼ・混雑状態を力にしている。
注3	富の不平等を示すジニ係数(4.0が危機ライン)は、日本2.7(低い)、中国6.1、米国4近い

この分析が正しいとすると、フリードマン氏の予測は、アメリカが勝つ(強い)という点は当たっているようですが、日本の予測については外れですね。  
「何か天変地異・奇跡が起きない限り」

さあどうなるのでしょうか！！

【このテーマの目的・ねらい】

目的：

- 呉善花さんの力作をご紹介します。
- 韓国の歴史を正しく認識しましょう。

ねらい：

- 国とも個人とも韓国人の特性をよく理解してお付き合いしましょう。

前置き

ナッツ姫が2月12日執行猶予なし懲役1年の実刑判決を受けました。裁判官は、被告の提出した反省文を、「本人が書いたものか疑わしい」と反省を認めずに実刑判決となったものようです。そういう判断をするというのはなかなかのものです。

その背景には、国民の財閥に対する大きな不満があるようで、裁判官はその点も考慮したようです。この際、韓国民の精神構造をもう少し理解してみましよう。

「『反日韓国』の自壊が始まった」は、拓殖大学国際学部教授呉善花さんの著書です。



この書名は例によって出版社のどっちあげで、当書の内容は、韓国人の思考・行動特性を日本人と対比させながら客観的に分析している正当なものです。

呉さんは韓国出身なのですが、日本の歴史・文化・風習を日本人以上に勉強しています。ほんとうに感心します。

以下はかなりいい加減な要約になっています。詳細は是非原典をお読みになってください。

第1章が「韓国の自壊が始まった」ですが、ここに書かれている自壊は2点です。

一つは、セウォル号事件のような無責任・手抜き工事や作業が頻発していること、もう一つは、朝鮮戦争・ベトナム戦争での韓国軍の非道極まりない蛮行が明らかにされつつあることです。

大虐殺や大暴行・大強姦です。これはイスラム国やナチスに次ぐほどの本当にすごいことだったようです。こんな国家はもつわけがないという呉さんの主張です。

それは「反日」韓国ではなく、単に韓国の自壊なのです。

第2章以降になぜこんな無責任な行動が頻発するのだろう？という分析が行われます。

基本線はこういうことです。

韓国人は、公（社会・国家等）よりも私（身内）を大事にする。「ナッツ姫」事件も公私の区別がつかない私優先での思考結果です。

他人と知り合うと早く身内にしたいと思うので、馴れ馴れしくべたべたと接触したがる。

身内の関係はお互いに負担をかけあう・貸し借りを作るのが本来で日本の習慣である「ワリカン」は他人行儀で冷たい、とみるのだそうです。

以下のように正義の基準が日本や多くの国とは違ってきます。

- 血縁親族についてはその罪を隠すことすら正義と考えられている。
- 孔子の教えがそうになっている。
- 韓国の犯罪で偽証罪が世界的に群を抜いて多い
- 韓国の誹告罪（人に刑事処分または懲戒処分を受けさせる目的で、虚偽の訴えを起こす罪）の件数は日本の数千倍にも及ぶ。

呉さんの丁寧な実証的分析を、表として整理すると以下のようになります。

呉さんの韓日比較分析

比較項目	韓国	日本
1. キリスト教信者	クリスチャン大国 現生のご利益を期待する	クリスチャン小国
2. 近世の国の支配層	文人統治（李朝）	武人統治
3. 国家の理念	事大主義（大国に従う）	自立自尊
4. 処世原則	理念主義（観念的理想を求める）	実際主義
5. 「悪」に対する寛容性	勸善懲悪	悪人正機（善人なおもて往生す、ましてや悪人おや）
6. 行動原理	孝（私）重視	忠（公）重視

500年以上続いた李王朝時代は徹底した文人統治だったということは意外でした。中国本土からしょっちゅう侵略され続けた国がなぜ武を重視しなかったのでしょうか。

これは私の仮説ですが、こうだったのでしょう。中国国家の強大さは、小国の朝鮮が多少頑張ってみてもどうにもなるものではなかったのです。

つまり武力は何の足しにもならず、むしろ、中国にうまく取り入って滅ぼされないようにすることが国を維持する戦略でした。それをうまくさばく文人が優位だったのです。

文人統治と事大主義（大国に従う）は根は同じです。

理念主義と勸善懲悪とも根は同じで、観念的なのです。

これは、弱者の逃げの論理です。現実的な目標の実現に努力するのではなくキレイごとで誤魔化そうとするのです。



それも自立自尊ができなかったコンプレックスの裏返しなのではないでしょうか。

忠（公）よりも孝（私）を重視するのは、中国におもねる公など信頼できない、自分の身は自分で守るしかない、ということなのでしょう。

神頼みをするキリスト教（福音派が多い）信者が多いのもそのお国柄のせいでしょう。

こうして見ると、韓国のお国柄は、自立できなかった事実をキレイごとでよく見せたい、よく思いたいということからきていると解釈すれば、すべて繋がってくるのではないのでしょうか。

神様が見ているから悪いことはしていけない、という意識がないので冒頭に記述した残虐非道もできるのでしょう。

日本人は例外を除いてそんな非道はしていないでしょうね。

上から目線で申し訳ないのですが、以上のような韓国のよって来るところを考えれば、韓国の「言いがかり」には、寛大に対応してあげましょう。韓国が非を通せばそれこそ自壊するでしょうから。

## 516 「人と企業はどこで間違えるのか？」

No.78 2015年3月

### 【このテーマの目的・ねらい】

目的：

- 米国のビジネス界における失敗案件の失敗理由を研究しかけて？いただきます。
- 上野流の「買う理由」「買わない理由」を研究いただきます。
- 消費者の行動はなかなか分からないということを再確認いただきます。

ねらい：

- この知見を何かに活かしていただきます。



本項は、ジョン・ブルックス著の本件名の書籍の紹介です。「成功と失敗を分ける10の物語」という副題にありますように10事例の紹介があります。

日本にはあまりなじみのない案件がほとんどです。そこで、その案件を知らない人にも興味が湧くように物語のように状況を紹介して失敗要因を明らかにしようとしています。

しかし、冒頭のフォード社の大失敗にしても失敗の本当の原因は不明なのです。

## フォード社のエドセル社の失敗

1957年に開発費2億5千万ドルを投入して「まったく新しいコンセプトの車である」と前宣伝をして売り出したエドセルが僅か2年2か月で10万台強しか売れず製造中止となりました。

その間の損失は3億5千万ドルでした。

いくつかの失敗原因があげられています。

- 1) フォード創業者の名前をとった「エドセル」は垢抜けしない。
- 2) 差別化・ユニークさを狙ったデザインが奇抜というか悪趣味だった。
- 3) ぜいたくな機能（自動変速機、豪華な内装、緊急時の安全機能、など）の高価格中型車が受け入れられなかった。  
この要因として、売り出した直後にソ連のスポーツニク1号の打上げが成功し、アメリカの技術に対する自信・信奉が崩れたことも挙げられています。
- 4) この頃から、小型車への嗜好が始まっている。
- 5) マーケティングがあげすぎた。（ディーラ対策は万全だった）

しかし、結局のところ何が主原因であったかは不明です。

ユニークなデザインは、受入と拒否が紙一重です。その時代背景にもよります。高機能・高価格を求めるか標準機能・低価格を求めるかも同様です。

以下のように、商品化のプロセスがまずかったというのが著者の意見です。

緻密な市場分析とマーケティング戦略に基づかず、勘に頼った時代遅れの手法が忍び込んでいた。デザインは雑多な意見の寄せ集めだし、商品名の選定も誰かの独断で決められた。

素人の私としては、やはり外観が大きな要素だったのではないかと思います。



車を見たときに「いいな」と思うかどうかです。  
「いいな」と思えば、機能とか値段を確認します。

当時、店頭に来て買わなかった人の調査をしていないので、なんとも言えません。  
なぜその調査をしないのでしょうか？

セールスマンとしては、なんとか売り込もうと努力はするのですが、買わない理由は調査する気にならないのでしょうか。

一般に買う理由は明らかですが、買わない理由はあいまいなのです。

私なりに、商品を買う理由・買わない理由を整理してみました。

	日用品	生活必需品 (電機製品等)	ぜいたく品
その 買う 理由 を	<ul style="list-style-type: none"> <li>品質がよい</li> <li>価格が安い</li> <li>買う場が便利</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>機能が優れている</li> <li>価格が納得いく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>満足感が得られる(気に入る)</li> <li>価格が納得いく</li> </ul>
その 買わ ない 理由 を	<ul style="list-style-type: none"> <li>買う理由が他の商品に負けている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>買う理由が他の商品に負けている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>買う理由が得られない</li> </ul>

これによれば、日用品や生活必需品は、買う理由・買わない理由がはっきりしています。

昔は百貨店、その後はGMS(スーパー)が「買う理由」として消費者の支持を受けていました。

ところがその後、以下のような各種の専門店が出てきてGMSも「買わない理由」の仲間に入ってしまった。

食品スーパー、コンビニ、ミニスーパー、100円ショップ、ドラッグストア、大型電機店、ショッピングセンター、アウトレット、安売り店(ディスカウントストア)

ところが、ぜいたく品の買う理由「満足感が得られる」は内容不明なのです。おそらく事前の市場調査でもこの点は明らかにならないでしょう。

世の中の動向から察知して仮説を立て取り組むしかないのです。感(勘)の優れた人の勝ちです。

しかし、開発した「ぜいたく品」が売れないときに、買わない理由を調査したとして、それを製品の改良に繋げることはできるのでしょうか。

おそらくそのような軌道修正を行うことができないので、その製品の改良には役立たず、次の製品を作る時の参考にするしかないでしょう。

だとすると、誰が「買わない理由」の調査をするのでしょうか？

このことが、買わない理由の調査が行われない理由なのかもしれません。

フォードのエドセルの失敗原因は、「ぜいたく品」としての狙い目で失敗しただけでなく、「生活必需品」としての「買う理由」からは完全に外れた、ということもあったのではないのでしょうか。

本書では、この事例の他に、ゼロックス社が独占的利益を維持し続けるためにどのような努力をしているか、とかGEの1950年代の談合がなぜ起きたか、とかの事例が紹介されています。

しかし、平均で30数ページに亘る「人文科学的物語」は、私の「読む理由」を満足させることができず、ギブアップいたしました。

ご関心ある方は、原本をお読みください。

517	「大義なき選挙」の大義は何だったのか！
No.78	2015年3月

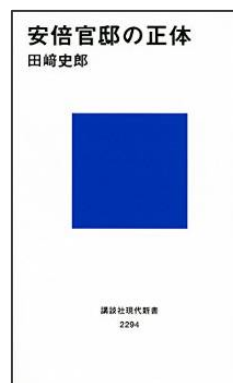
【このテーマの目的・ねらい】

目的：

- 「大義なき選挙」の大義が何であったのかを知っていただきます。
- 安倍官邸の意思決定機構を知っていただきます。
- 安倍総理の「愛国」の実態を知っていただきます。
- 安倍総理復活のタネアカンを知っていただきます。

ねらい：

- 何かを納得していただきます。



昨年12月の衆議院解散総選挙は、国民目線では「大義なき戦い」でしたが、その「大義」が分かりました。

時事通信社解説委員田崎史郎氏の「安倍官邸の正体」で解明されたのです。既にご存じだった方も多いのかもしれません。

それはこういうことです。

安倍政権では、アベノミクスを打ち出し日本経済の復興を目指していた。ご承知のようにその3本の矢は金融、財政、成長で、本命が成長である。

成長がなければ国家財政の均衡はありえない。

消費増税は短期的には税収増になるが、成長を削いでしまつては元も子もなくなる。

その意味で消費増税は増税を吸収できるだけの勢いが経済にある時でなければならない。

したがって次の増税を意思決定するには、4月の8%への増税が経済にどのような影響を与えているかを把握しなければならない。

経済指標を見ると弱含みで次の増税には慎重にならざるを得ない、と総理筋では判断していた。

ところが、財務省・財務官僚・その同調議員が、「慎重」の動きを察してすさまじい「ロビー活動」を行った。

その状況で、増税延期を打ち出そうものなら「政局になってしまう」（「政局になる」というのは、政権の責任問題に発展するという意味だそうです）

解散をすれば、選挙がすべてになり「政局」問題を回避できる。

極秘裏に行われた選挙情勢調査でも、自民党優位の情報が得られていた。

早期の選挙実施は準備が整っていない野党に対しても有利である。自民党および安倍政権にとって長期安定基盤を得ることができる。

つまり、キレイに整理すると、アベノミクスの成長戦略を通すために消費増税を延期する必要があり、増税強硬派の財務官僚対策のための選挙だった、ということになります。

財務官僚対策だ、などとは言えませんから、婉曲にアベノミクスの信を求める、などという言い方をしたのです。これでは分かりません。「大義なし」になってしまいます。

結果はオーライでした。今のところ、日本経済は消費増税を呑みこむほどの体力はなさそうです。

ところで、同書の本題である「安倍官邸の正体」はこうなっているようです。

## 安倍官邸の意思決定機構

ほぼ毎日、首相官邸で開催される「正副官房長官会議」、出席者は

安倍晋三総理、菅義偉官房長官、  
加藤勝信・世耕弘成・杉田和博官房副長官  
今井尚哉首席秘書官

で、この場で重要課題は検討されている。

正副官房長官会議は安倍官邸における「最高意思決定機関」と言える。

安倍総理は、菅に対しては全幅の信頼を置いている。

安倍は言う。「志を官房長官ともまったく同じにしている、私は（閣議決定が）うまくいかないと思う時もあったんだけど、官房長官は終始、強気なんだよ。

私の前ではけっこう『大丈夫ですから』って強気だった。いやもうちょっと時間を置くかな、なんて気持ちになる時もあるじゃないですか。そのとき彼は『この期を逃してはダメです』という感じだった。終始ね」

安倍総理と菅官房長官の息のあったチームプレーのようですが、やはり安倍総理のリーダーシップが強いようです。

安倍総理はどうして立ち直ったのか。

第1次安倍内閣を放りだした「無責任な」安倍さんが、どうして返り咲くことができたのでしょうか。

国民の多くは、2012年の自民党大勝の後の総裁・総理選で安倍さんが勝利したときに「意外！」の感じを持ちました。「なんで、安倍さんが??？」と。

第1次安倍内閣の安倍総理が2007年9月に退陣したのは、相次ぐ閣僚の不祥事を受けて参院選で歴史的な大敗をしたことへの引責辞任の要素が強いと思われていました。

ところが実際は安倍総理の健康障害で、辞任後直ちに難病「潰瘍性大腸炎」で長期入院しました。

おそらく入院中に、じっくり第1次安倍政権の経緯を反省したのでしょう。

この反省の成果が、非常に周到な現在の政権運営につながっているのだと思われます。

失礼ながら、安倍総理は非常に頭のよい方なのだと思います。

復帰のために、安倍総理が地元山口県の選挙区などで並々ならぬ努力を続けたことも本書で紹介されています。

第2次安倍内閣時代(2012年12月～)の安倍総理の言動は、極めて理に適っています。読みが的確なのです。

なぜ靖国神社参拝を強行したのか

納得のいく行動の中で、唯一大きな批判を受けている行動が、2013年12月の靖国神社参拝です。周囲の反対を押し切って参拝したのです。

田崎さんは、次のように分析しています。

「今の保守は右派とか左派とかの区別はできにくい、靖国参拝賛成派を「強硬保守」と言いたい。

安倍さんを第1次辞任後の雌伏時代に支えてくれたのは、強硬保守の人たち（評論家筋では、櫻井よしこ、金美齢ら）だった、その人たちへの「借り返し」だった」

安倍総理は「愛国的現実主義者」（田崎さんの言葉）

安倍総理は「強硬保守」ではない、と田崎さんは判断しています。

その根拠は、強硬保守の人たちは中韓を排斥・避難するが、安倍総理は「開かれた保守主義」を唱えていて、一線を画している、というのです。

安倍総理の「開かれた保守主義」を以下のように紹介しています。



## 2006年10月の衆議院本会議での安倍総理の発言

「私にとって保守とは、いわゆるイデオロギーではなく、日本および日本人について考える際に、自分の生まれ育ったこの国に自信を持ち、今までの日本が紡いできた長い歴史を、その時代に生きた人たちの視点で見つめ直すとする姿勢であると考えています。

一方で、そうした歴史に根差した保守主義という基盤に立ちながらも、それは閉鎖的あるいは排他的なものであってはならず、現実に対しても虚心に目を向けることで、開かれた保守主義を目指していきたいと思っています。

私の考えるナショナリズムとは、自分たちが生まれ、育ち、そしてなれ親しんだ自然や祖先、家族、また地域のコミュニティーに対する帰属意識であります。

そういう帰属意識があるからこそ、誰かに言われなくても、ごく自然なみずからの感情として、そうした自然や家族、地域に誇りを持ち、これらを壊さないように愛情を持って守ろうとする、そうしたものがナショナリズムであると考えております。

## 14年1月30日の参院本会議での発言

政治は国民のもの、自民党の立党宣言はこの言葉から始まります。私たち自民党には、右に偏った政治も、左に偏った政治もありません。あるのは、ただ現実の国民に寄り添う政治、それだけです。

(中略)

南西の海では主権への挑発が繰り返されています。日本の安全保障環境は厳しさを増している、これが現実であります。

そうした現実の下で、私たち自由民主党は、国民の生命と財産は断固として守り抜いていく決意であります。これは右傾化などでは決してありません。国民を取り巻く現実を直視した責任ある政治にほかなりません。

そのとおりですね。まったく同感です。安倍総理の国を思う精神はまったくぶれていません。

このような愛国精神は、人間であれば誰しも持っているものだと思いますが、今の多くの日本人はそれを見失っていると言われてしています。

安倍総理が「現実を直視する」という点では以下の意見開陳があります。

自分の方針を打ち出し、各政党や世論の動向を冷静に見て、押し通せるなら押し通す。分厚い壁にぶち当たったら「ゼロか100」という勝負ではなく、30でも40でも徐々に積み上げていこう。(正論10年10月号の目下公人によるインタビューでの発言)

現実主義という点では、テレビなどの画像を通じたイメージづくりを重視しています。

本書で例として挙げられたのは、14年9月の内閣改造時の記念撮影です。

女性閣僚5人に安倍総理を囲ませています。女性重視をアピールしているのです。

## 安倍総理の国を愛する精神はどこから来たのか？

このような安倍総理の信念・愛国者としてのバックボーンはどこから来ているのでしょうか。

田崎さんの著書での紹介文です。ニクソンは信用できませんが、いいことを述べています。

ニクソン元米国大統領の著書「指導者とは」の中でチャーチル元英国首相、ドゴール元フランス大統領、アデナウアー元西ドイツ首相についてこう述べている。

「多くの指導者が荒野にさまよう過去を持ち、その間に得た洞察力と英知、復帰のための闘争が養った力などが、のちに威力を発揮したのだった。

安倍総理もまさにそうだったのです。雌伏5年余の間に賢明な安倍総理が磨いた「洞察力と英知、復帰のための闘争が養った力」が今の強い安倍総理を作ったのです。

追記：私としては、安倍総理の愛国精神のよって来た所の全容解明ができたとは思えません。今後の課題としたいと思います。

518	なぜ人間は誤った判断をするのか！「失敗はそこからはじまる」
No.78	2015年3月

### 【このテーマの目的・ねらい】

目的：

- 人間はいかに客観的・公正な判断ができないものかを膨大な実験結果によって知らされます。
- どういうことによってそのバイアスが起きるかを知らされます。

ねらい：

- こういうことについて関心を持たれましたら、本書でご研究ください。



この本は、フランチェスカ・ジーノというイタリア出身のハーバードビジネススクールの美人経営学準教授が書かれたものです。

なぜ人間の意思決定の誤りが生じるかを心理学的な実験によって解明している極めて実証的な研究成果発表です。

別項の「人と企業はどこで間違えるのか」の続編的な位置づけともなります。

人間の意思決定にバイアスのかかる原因を9つの原則としてまとめ上げている科学的アプローチが気に入りました。

以下にご紹介します。  
……続く言葉は、バイアスを避けるための対策です。

1. セルフィメージ ……	自己認識の「歪み」を自覚する
2. エモーション ……	感情の体温を測る
3. フォーカス ……	ズームアウトして「視野」を広くとる
4. ビューポイント ……	相手の「視点」にスイッチする癖をつける
5. リンク ……	社会的な「つながり」の影響力を把握する
6. ランキング ……	自分の「評価基準」を問い直す
7. インフォメーション ……	情報とその「出どころ」を多面的に確認する
8. フレーミング ……	選択肢の「型」を見破る
9. シチュエーション ……	状況の力から自分の「基準」を守る

どの項目もそのタイトルから想定がつかます。  
代表的ないくつかの内容をご紹介します。

1. セルフィメージ ……	自己認識の「歪み」を自覚する
---------------	----------------

自分の判断にバイアスがかかるのは以下の場合です。  
1) 自分がそのことについてよく知っているという過信  
2) 自分が優れていると思う心  
3) 権力は人を自己中心的にする。  
4) 人の意見はタダよりも高いお金を出した方が聞く。  
(高いコンサルが有効な理由)

本書がいかにも実証的な実験を行ったかの例として以下をご参照ください。

力量の過大な認識と自信過剰のせいで私たちが助言を受けつけなくなることがどれほど多いかにいったん気づけば、そうしたバイアスからどう身を守ればいいのか、あなたも考えはじめるかもしれない。

ビジネススクールの講座やエグゼクティブ向けのコースの受講生にその方法を問うと、たいいてい同じような答えが返ってくる。

経験を積み、統率力を身につければ、意思決定を行うときに自分と他者の意見を批判的に比較検討しやすくなるだろうというのだ。

この考えが正しいかどうかを確かめるため、私は研究仲間のリー・トースト（ミシガン大学教授）とリック・ラリック（デューク大学教授）とともに実験を行った。

ある寒い冬の日、カーネギーメロン大学の学部生 107 人が、謝礼と引き換えに私たちの実験室にやってきた。

参加者は 1 人ひとり、コンピューターが置かれた仕切りの中に入り、本人たちは無関係だと思っている 2 つの実験に参加した。

一方は体重を推定する 2 部編成の実験で、もう一方は生き生きとした文章を書く技能の実験だ。

体重推定実験のために参加者が取り組んだ課題は単純で、3 ラウンドから成り、各ラウンドで、人の写真を見てその体重を推定するというものだった。

その推定が写真の人の本当の体重に近ければ近いほど、そのラウンドでもらえる謝礼が増えた。

この課題のあと参加者には、「次の実験に進むが、のちほどもう 1 度写真を見る機会がある」と告げた。

生き生きとした文章を書く技能の実験には、「ハイパワー」条件、「ローパワー」条件、対照条件の 3 つがあった。

「ハイパワー」条件加者には、他者に権力を揮うことができた状況を、「ローパワー」条件の参加者には、他社に権力を揮われた状況を、対照条件の参加者には、前回食料品店に行ったときのことを、それぞれ思いだすように求めた。

参加者は文章を書く課題を終えると、体重推定実験の第 2 部に進み、第 1 部で見た写真に写っていたのと同じ人たちの体重をふたたび推定した。

ただし今回は、自分の意思決定プロセスで利用できるように「推定値」を与えられた。  
実験時の指示によるとその推定値は、以前の実験で助言者役に割り振られ、推定値の精度に基づいて謝礼を受け取った参加者たちが見積もった値からランダムに選ばれたものだという。

なお、この推定値（じつは、私たちが決めた）は精度が高く、写真に写った人の本当の体重プラスマイナス 5 パーセントの範囲に収まっていた。

参加者は推定値がどれほど正確かは知らなかったが「推定値の精度に基づいて謝礼が支払われた」のだから、かなり正確だと思って間違いなかった。

この推定値を利用すれば、参加者たちは実験を終えたときにはより多くのお金を受け取れたはずだ。  
だが私たちは、こうした事実は伏せておいた。

あなたがこの実験の参加者だったとしよう。  
最初の体重推定課題では、あなたは写真を注意深く眺め、それから 83 キロ、79 キロ、90 キロという具合に推定する。

次の文章課題では、他者に力を揮った状況について考えて書くように求められる。

そこで、前回プロジェクトチームを率い、チームのメンバーに必要性や要請、成績に応じて資源を割り振る権限を握っていたときのことについて書きはじめる。

チームのメンバーが頼りとする資源の使途はあなたの裁量次第だったのでそのときに抱いた権力があるという感覚をあなたはありありと思い出す。

別の人の助言を目にする機会を得たあと、あなたは自分の推定値を修正するだろうか？前に見た写真に対して最初に下した判断を手直しするだろうか？

この実験の結果、以前の参加者の助言に耳を傾ける度合いは、参加者が文章課題を終えたあとで自分にどれほど大きな力があると感じているかにかかっていたことが明らかになった。

「ハイパワー」条件の参加者は、対照条件や「ローパワー」条件の参加者ほど助言を利用せず、「ローパワー」条件の参加者は、対照条件の参加者よりもよく助言を利用した。

参加者は文章課題で権力があるという感覚を得ると、判断を下すときに 66 パーセントの割合で助言を無視した。

逆に、権力のなさを感じたときには、判断を下すときの 26 パーセントでしか助言を無視しなかった（対照条件の参加者は両者のあいだで、34 パーセントだった）。

この結果からは、私たちの直感とは裏腹に権力は役に立つ助言を無視する傾向を強めるらしいことがわかる。

この実験の文章課題が引き起こした、「権力があるという感覚」はかすかで一時的なものであったにもかかわらず、参加者は楽観と自信過剰の度合いが高まり、そのせいで他者の助言を利用する気をそがれた。

この実験では、助言の質がそもそも高かったので、自分に権力があると感じた参加者が最終的に下した判断の精度は下がり手にする謝礼も減ってしまった。

権力があると感じ、その結果自信過剰になって、リーダーの地位にある人が適切な助言を無視した可能性のある最近の事例を見つけるのは難しくない。

2004 年以降、一部の経済学者が、住宅バブルを維持するのは不可能で暴落が待ち受けている、と警告しはじめた。

1987 年から合衆国連邦準備制度理事会議長として非常に高い評価を受けていたアラン・グリーンズパンは、そうした警告を退け、サブプライム住宅ローンなどの危険なローンに対する規制を強化するよう求める声を無視した。

## 8. フレーミング…………… 選択枝の「型」を見破る

課題に対してどのような枠組み(フレーミング)を与えるかによって、人間の頑張り度は異なる。

例として挙げられたのはコールセンタビジネスの新入社員研修です。

研修プランが、「新人が組織に価値を加える機会」として設定された「組織重視」の場合は、「組織が新人の人生に価値を与える機会」として設定された「個人重視」の場合の 7 月後の離職率が 2.5 倍であった。

## 9. シチュエーション…… 状況の力から自分の「基準」を守る

自分に有利な状況に遭遇すると人間は誘惑にかられる。暗くなるとばれないと思って悪さをする。詐欺をしたり、自分に都合のよい言い訳をしたりする。

ここでも実験を繰り返しています。

この 9 原則のすべてが、常識的にはそうだとされていることですが、それをすべて実験で証明したということは凄いことです。

勉強になります。是非本書をお読みください。

519 我が家の河津桜が満開です

No.78 2015 年 3 月

【このテーマの目的・ねらい】

目的：

- 春の便りを見ていただきます。

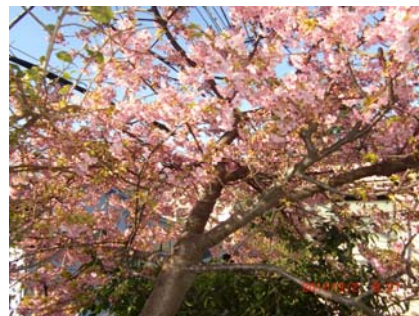
ねらい：

- 本格的な春を待っていただきます。

これは我が家の河津桜です。

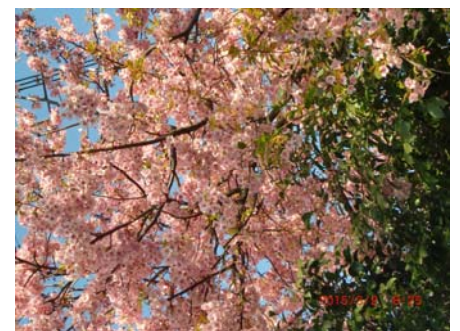
通りを通る人たちが見上げて行っているのを見えています。立ち止まる人もいます。その方たちと会話を交わします。

気がつかない人も多いのです。上を見ない人です。



この河津桜は、14 年前の 2001 年 3 月に河津へ行ったときに苗木を買ってきたものです。桜の成長は早いですね。もう電線の高さを超えています。

河津桜は、2 月初めには蕾が膨らみ、1 カ月後が満開で、未だ 1 週間以上咲いているでしょう。



我が家の庭は狭いので、家の壁にそって枝を延ばしています。頑張りませぬ。

